

# 技術革新と死者祭祀手法の変遷

## 1990年代以降の変容と今後の展望

Technological Innovation and Shifting Memorial Practices :  
Developments Since the 1990s and Future Perspectives

瓜生大輔

URIU Daisuke

- ① 死者の象徴・依代の変遷
- ② 1990年代以降に出現した死者祭祀手法
- ③ 死者祭祀に関連するデジタル技術
- ④ 死者祭祀に関する HCI デザイン研究
- ⑤ 議論, 今後の展望

### 【論文要旨】

20世紀初頭, 写真技術の普及とともに, 一般市民も故人の肖像写真(遺影)を残せるようになった。これは, 長らく故人の象徴あるいは依代として家内で祭祀されてきた位牌に代わりうる, 新たな祭祀手法の出現であった。そして今日, デジタル技術の普及により, 故人を偲ばせる大量の記録が残せるようになった。写真のみならず, 故人にまつわる様々な種類の情報, デジタル「故人情報」が死者祭祀の用途でも用いられるようになった。

本稿では, まず, 1990年代以降に現れたデジタル技術を用いた死者祭祀の事例と, 関連する技術について述べる。これに加え, 私がこれまでに取り組んできたデジタル技術を用いた死者祭祀のためのデザイン研究, そして関連する HCI (ヒューマン・コンピュータ・インタラクション) デザイン研究も紹介する。これらの事例の分析を通して, 近未来の死者祭祀に関する論点を提示し, 考察を加える。

火葬の普及により遺骨の扱いやすさ(ユーザビリティ)が飛躍的に向上し, 分骨, 改葬などが可能となった。「葬送の自由」が謳われてから四半世紀が経過し, 近年では, 散骨や手元供養といった遺骨の保管にとらわれない葬法も一般化した。

今後, クラウドシステムを介したデジタル故人情報の利用が広まれば, そのユーザビリティはさらに向上し, いつでもどこからでも参照可能となる。家外・家内祭祀の区別はなくなり, 祭祀システムの連携・統合が進む。しかし, 現時点で主流の汎用的な情報機器は, 死者祭祀の道具としては物足りない。最先端の HCI デザイン研究を参照することは, 死者祭祀に特化したデジタルツールのデザインにもつながる。

さらに, 近年の生成 AI 技術の進展により「死者 AI」という新たな課題も浮上している。現状では未知数な要素が多く存在するが, AI 時代における家内祭祀の方向性や, その変化の可能性についても展望する。

【キーワード】 死者儀礼, 家内祭祀, デジタル技術, デザイン, 手元供養